

フィリピンの地方都市における子どもたちのスポーツ環境 — バスケットボールとの関わり方を通して —

藤後 悦子・大橋 恵

The Children's Sports Environment in a Local City in Filipin
— A Case Study of Filipin's Basketball —

Etsuko Togo and Megumi M. Ohashi

要 旨

本研究では、日本と同様に学校でのスポーツ活動が学校制度の中で中心的役割を担っているフィリピンの子ども達のスポーツ環境に注目し、スポーツ参加の動機づけや継続要因等を明らかにすることを目的とした。スポーツは、近年フィリピンで最も人気のあるバスケットボールを取り上げ、フィリピンの地方都市バコロド市において、バスケットボールに関わる様々な年代の人々へのインタビューを行った。その結果、フィリピンの子ども達のバスケットボールの継続要因としては、村に手近な無料コートがあること、村のスポーツフェスティバルの存在、身近にロールモデルとなる大人や先輩の存在があること、学校の部活動以外の選択肢があること、「遊び」としてのスポーツの時期が長いことなどが関係し、学びの根底にある動機付けを高める要素が多く含まれていることが明らかとなった。

キーワード：フィリピン、バスケットボール、子どものスポーツ、バランガイ、モチベーション

1. 問題と目的

スポーツは、子ども達から大人までとても有益であり、健康増進、社会性の促進など様々な効果を示している。日本では、現在生涯スポーツを推進しており、その入り口となる小学校時代のスポーツ経験は、その後のスポーツの参加・継続動機づけに大きな影響を及ぼすであろう。世界では、子ども達のスポーツの受け皿は大きく、学校（部活動）中心、地域中心、地域と学校（部活動）の両方との3種類に分けられている（中澤, 2017）。学校（部活動）中心の国は、日本の他にも韓国、中国、フィリピンなどのアジアが中心であり、地

域中心の国はドイツ、デンマーク、フィンランドなどのヨーロッパが中心であり、学校と地域の両方の国にはアメリカやニュージーランドなどが挙げられる。中澤（2017）によると、日本は学校中心に分類されているが、実質としては小学生までは地域中心で、中学生以上は学校の部活動中心といえるであろう（大橋・藤後・井梅, 2018）。

小学生を対象とした日本の地域スポーツは、主に民間のスポーツクラブ、地域総合型スポーツクラブ、ボランティア主体の地域スポーツの3つに分けられる。その中でも野球やサッカー、バスケットボール（以下、バスケ）などのチームスポーツは主にボランティア主体の地域スポーツが

担っており、その運営にはボランティアコーチや試合や練習の当番および送迎を行う親なしでは成り立たない（大橋ら，2018）。そのため親子の絆が深まる一方で、親の過干渉やチームの親たちによる子どもへのプレッシャーなどの問題も指摘されている（Brustad, 1993；藤後・井梅・大橋，2017）。このような問題を受け筆者らは、スポーツ先進国のアメリカの例を取り上げ、日本における親教育の必要性を提唱してきた（藤後・川田・井梅・大橋，2017）。

本研究では、日本と同様に学校中心として位置づけられているフィリピンの子供達達のスポーツ環境に注目し、子供達のスポーツ参加の動機づけや継続要因等を明らかにし、日本の子供のスポーツ環境に参考にできる要素を抽出することとする。

フィリピンでは、アメリカ植民地時代にレクリエーションとしてスポーツが入ってきた（Blanco, 2016）。1987年にスポーツと若者省（Ministry of Sports and Youth Development）が設置されており、その時代にすでにアマチュアスポーツを含めたスポーツの振興を謳っている（Philippine Sports Commission, 2017）。フィリピンにおいて近年最も人気のあるスポーツはバスケットだと言われている（Antolihao, 2012; Blanco, 2016）。その競技力は世界的にも高く、FIBA（2018）のワールドランキングでは30位と日本（49位）より上位に位置する。

バスケットは1891年にアメリカにて誕生し、1898年に中国、1908年に日本、1910年にフィリピンに広がった。フィリピンでは1975年にプロリーグが設立されており、これはアメリカのNBAに続き世界で2番目である。リーグは2つに分かれており、フィリピン人のみが参加できるフィリピン・カップと、外国人選手が参加できるフィエスタ・カンファレンスで構成されている。年間を通してバスケットの試合をテレビで視聴することが可能であり、国民にとってバスケットは身近な存在である。

後藤（2004）はフィリピンのある村の大会の様子を次のように示している。「毎年4月に開催され、一ヶ月以上にわたってバスケットのトーナメント戦が行われる。参加希望者は、近隣に住む者や親戚同士でチームを結成し、役場に届け出る。大会に必要な経費は予算でまかなわれることもあるが、トロフィーやユニフォームの作成経費は、町議員や町長からの寄付によってまかなわれていた。大会まで各チームは村落内の路上やバスケットコートで練習を行い、トーナメントが開始されると数百人の観客が毎晩のように押し寄せる。バランガイ（村の単位、地区を表すもの）長や評議員らは、バスケット大会は若者を麻薬から遠ざけるための有効な手段ととらえているが、このように地域住民にとっての重要な娯楽活動の一部ともなっていた」。本内容からも推測されるが、フィリピンのバスケットは、「近隣に住む者や親戚同士でチームを結成し」「各チームは路上やバスケットコートで練習を行う」など、①生涯スポーツ及び娯楽活動の一部として機能していると同時に、②「麻薬から遠ざけるための有効な手段」という住民自治の方法として機能していると考えられる。

ところで、このようにフィリピン人にとっては生活に身近なバスケットであるが、このような環境の中で、子供たちはどのような経緯でバスケットを開始し、それがどのように継続されるのであろうか。また日本やアメリカのように、子供のスポーツに親の関与が必要となるのであろうか。ドロップアウトは存在するのであろうか。また、本格的にアスリートの道に進む場合、どのあたりが岐路となりうるのであろうか。

フィリピンと同じようにプロリーグが存在するアメリカや日本の子供達の様子であるが、アメリカの場合、ストリートバスケットも盛んであるが、同時にスクールに行ったりパーソナルトレーナーを雇ったりすることも多い（大橋・藤後，2017）。一方日本の場合、地域スポーツとして小学生対象のミニバスが存在しており、これは主に親も含めてボランティアコーチの元で小学校の体育館や公

立の施設を借りてバスケットをプレーする。子どもが小さいことと、月謝が安くボランティアコーチであるため、親の関与なしではバスケットの継続およびチーム運営が難しい。ゆえに子どものスポーツ継続には親の負担問題が付きまとう（木村・邵・朝永, 2017）。フィリピンの子ども達のスポーツ環境は、日本と同様に学校中心として分類されているが、実際に地域はどのような役割を担っているのでしょうか。もし子どものスポーツに親の関与が必要な場合、経済的にも時間的にも親は子どものスポーツに積極的に関わることができるのでしょうか。このような疑問のもと、フィリピンにおけるジュニア期のスポーツの代表であるバスケットの実態について、フィールドワークを中心にその様子を明らかにしていく。

2. 方法

対象地域

フィリピンのバコロド（Bacolod）市。バコロド市はフィリピン中部ヴィサヤ諸島のネグロス島北部に位置する大都市である。村の部落の単位を表すバラングイの数は61である。フィリピンで最も安全な都市と言われており、バラングイ文化が根付いている地方都市である。

対象者

小学生から成人まで様々な年代の、バスケットボールに関わった経験のあるフィリピン人12名（グループ含）（Table 1）。生涯スポーツとして各年代でどのようにバスケットが位置付けられているかを検討するために、フィールドワークを行う中で

Table 1 インタビュー対象者

対象者	性別	年齢	バスケット歴	職業	現在のチーム	バスケットを行う場所	きっかけ	親の関わり	チームの競技レベル	本人の競技レベル
A	男性	22	約15年	学生	大学	大学の体育館	遊び/村の大会の応援/TV	試合の応援	全国	レギュラー
B	男性	22	約15年	学生	大学	大学の体育館	遊び/村の大会の応援/TV	試合の応援	全国	レギュラー
C	男性	22	約15年	学生	大学	大学の体育館	遊び/村の大会の応援/TV	試合の応援	全国	レギュラー
D	男性	21	約15年	学生	大学	大学の体育館	遊び/村の大会の応援/TV	朝練を指導練習見学や送迎、応援	全国	準レギュラー
E	男性	38	約25年	語学学校の英語教師	有志による地域スポーツ	村のコート	遊び/村の大会の応援/TV	応援	不明(村優勝)	レギュラー
F	男性	35	約15年	タクシー運転手(1)	有志による地域スポーツ	村のコート	遊び/村の大会の応援/TV	なし	不明	レギュラー
G	男性	40	約30年	タクシー運転手(2)	なし	現在は行っていない	遊び/村の大会の応援	応援	なし	プロテスト経験者
H	男性	12	約3年	地域の子どもの(小学生)	学校のチーム	公園、道路、学校、民間の	遊び/村の大会の応援/TV	なし	県大会	レギュラー
I	男性	52	約30年	民間のバスケットコートの管理者	有志による地域スポーツ	民間のバスケットコート	遊び/村の大会の応援/TV	なし	不明	不明
J	女性	26 弟20,兄24,父45	兄弟、兄の経験年数約10~20年	語学学校の先生(女性): 家族がバスケット経験者	大学等	村のコート、 大学のコート	遊び/村の大会の応援/TV	応援・差し入れ	県大会	レギュラー ~セミプロ
K	男性・女性	17歳	約8年	高校生(数名)	なし	高校のコート	遊び	なし	なし	遊び
L	女性	28	兄の経験年数不明	語学学校の先生(女性): 兄がバスケット経験者(自閉症)	なし	村のコート	村のコートでの運動	なし	なし	軽い運動として

出会った人々やバスケットに関連している人々を中心にインタビュー協力を依頼し、快諾してくれた者である。なお大学生4名に対しては、大学所属チームを通してインタビューを依頼した。大学は、私立大学でありバコロド市内のバスケット部では上位に位置する強豪校である。このチームでプレーをしている選手はその地方のエリートであり、彼らがどのようにバスケットに関わってきたかを明らかにすることは、アスリートへの分岐点の把握としても参考になると考えた。

手続き

フィリピンの子ども達のスポーツへの参加およびその後の継続について明らかにするため、30分～1時間程度のインタビューを実施した。この手法は、参与観察的なエスノグラフィーに基づいている。インタビュー内容は可能な限り録音を行った。

質問内容は以下の通りであった。1) バスケット経験：バスケット経験の有無。経験がある場合は、いつ頃から、どのような場所で、誰とプレーを行ったか。2) バスケットの対人関係：監督と選手との関係、選手と親との関係など、3) 継続性：バスケット継続の要因などであった。

時期

2018年8月

倫理的配慮

東京未来大学の研究倫理委員会にて承認された。インタビューに関しては、書面または口頭にて確認した。匿名であること、任意であること、学術的な利用を行うことを説明し、了承を得た。

3. 結果

(1) バスケットへの子ども達の関わりのかきかけ

本研究のインタビュー対象者は、バスケットへのかかり方はそれぞれ異なっているが、小学生のころから本格的にチームに所属してバスケットを行っている者は12歳の男子Hの1名のみであった。Hは小学校のチームに所属していた。期間限定で学校間のスポーツ大会が開催されるので、その直前

に学校内でチームが結成されるとのことであった。

12名のインタビュー結果から、子どもたちがバスケットを行うきっかけとして以下の6つが挙げられた。①テレビからの情報、②ストリートバスケット、③学校のスクールチーム、④バランガイの無料コートでの遊び、⑤バランガイでのスポーツフェスティバル、⑥住宅地にある民間の有料コートであった。以下に順に説明する。

①テレビからの情報については、フィリピンではバスケットのプロリーグが年間を通じて放映されているため、子ども達は、プロのプレーを映像で見ることができる。そのため、自然とバスケットをプレーするイメージが付きやすく、子ども達のあこがれとなっている。



写真1 道端のバスケットのゴール2か所
(左は白いゴール、右は茶色いゴール)

②ストリートバスケットについては、実際に街中にも手作りのバスケットゴールが多く(写真1)、道端や遊びの中でバスケットに関わることができる。手作りゴールは交通路の少なめの住宅地に主によく見られたが、写真1(左)のように周囲に車や屋台などもあり、子どものための運動場所というよりは、日常の生活空間の中にゴールが置かれていた。また、「ストリートバスケットはタフで、ファイティングにもよくなる」(男性G)という発言からみられるように、自由に遊べる場であるが、子ども達の間で力関係によりストリートのゴールをいつも利用できる子どもとそうでない子どもがいるのかもしれない。「自分の子どもは、中学のス

クールチームから始めさせる。それまでは家の庭のゴールで遊んでおけばいいかな」(男性G)などの発言からわかるように、ストリートバスケットをあまり経験せずに学校でのスクールチームが最初のきっかけとなることもある。

③学校のスクールチームについては、公立の学校では、主に中学校から学校にバスケットチームがあり、そこに所属しながらプレーをする。しかし最近では、私立の小学校では、「チームが結成され、学校同士の試合も行われるようになってきている」(男子H)とのことであった。また「私立の学校の敷地を使って、子ども達を対象にバスケット教室などが開催されるようになってきている」(男性I)ようだ。大学のトップレベルで競技をしている男子学生A、B、C、Dは「小学校までは外で遊びながらやって、中学校から本格的に行った」と答えている。また男性Dが「小学校の時は勇気がなかったので、中学校から始めた」と答えているように、学校のスクールチームから開始するケースも多いようであった。

④バラングイでの無料コートでの遊びについてだが、多くのバラングイでは写真2のような無料コートが設置されていた。「バスケットは人気があるので、村の選挙の時にバラングイにコートを立てると言うのがいい」(男性B)。バラングイのバスケットコートは、コートとしての機能と同時に避

難所や備蓄置き場にもなっている。バラングイのコートは、いつも無料で開放されているので、大人が使っていない時間帯は、子ども達が自由に使っている(写真3)。男性Bは「自分たちは練習でバラングイのコートを使う。若い人は俺たちが来たら練習できない。その理由は彼らが若いからである」と発言しており、大人が使い始めたら子ども達はその場を離れないといけないという暗黙のルールがあるようであった。

コートの利用者間には、年齢や実力により利用の仕方に力関係が存在するかもしれないが、基本的には自由に誰もが利用できる。自閉症の兄を持つ女性Lは、「兄はふらっとバラングイのコートに行くとバスケットゴールにボールを入れて楽しく体を動かしている。そうする中で自然と知り合いができてきて、村にたくさんの友達がいる」と教えてくれた。つまり、本人が遠慮しない限り村のコートは自由な活動の場であり、障害の有無にかかわらずバスケットを通して人々との交流も広がることができていた。

⑤バラングイのスポーツフェスティバルの存在については、インタビュー対象者の多くがコメントしていた。バラングイのコートを使用し、年に1回スポーツフェスティバルが夏に開かれる。スポーツフェスティバルは、様々な競技がなされるようであるが、そのメインはバスケットであり、村で



写真2 バラングイの無料コート



写真3 無料コートで遊ぶ子ども達



写真4 街の有料コート

決められた対象年齢のバスケ大会が約2か月間に渡り開催される。通常小学生の大会は少なく、U18やフリーエイジの試合が開催される。チームは試合前に各自で結成され、親戚同士や友達同士で出場する。たまに小学生のチームも結成され、その場合夏の間練習が行われる。「以前U12の試合があった際は、頼まれて村の代表チームのコーチを行った」(男性B)とのことで、半永久的なチームではなくフェスティバルに向けた短期間限定のチームが結成される。各バランガイの代表チームが集まるスポーツフェスティバルの決勝リーグでは、毎日夜遅くまで試合が行われ、大変盛り上がる。「バスケが上手だとモテるね」(高校生K達)、「チームのために差し入れして、毎日夜中の12時過ぎまで応援していた。家族全員でサポートしていたが、全く負担だと思ったことはない」(女性J)とのことであった。このようなスポーツフェスティバルでのバスケの試合観戦が、バスケ競技への関心を持つきっかけとなっているようであった。

⑥住宅地の有料コートについてだが、村のバランガイの無料コートの他に、少し高級な住宅地には有料のバスケコートがある(写真4)。有料コートでは、少年日のように、大人たちがバスケをしている様子を夕食後眺めに来ていた(写真5)。また父親の練習に子どももついてきて、空き時間



写真5 夜に有料コートで子どもが見学

と一緒にバスケで遊んだり、練習したりしている様子がうかがえた。コートの管理人Iによると、「夏休みはコーチを呼んで、子ども達用の有料レッスンを行っている」とのことであった。

以上が、子どもたちの最初にバス

ケに出会う経路であるが、その他には現地のNGOが活動として子ども達を対象にバスケ教室などを行っている。

(2) バスケを継続する要因

本研究のインタビューの対象者は、年齢も社会的背景もさまざまであるが、ケガが原因でバスケを今はしていないというタクシードライバーJ以外は、継続してバスケを行っていた。そのため、どの年代であってもバスケを継続することが可能である様子がうかがえた。

本インタビューから、フィリピンの人々がバスケを継続できる仕組みとしては、バランガイのスポーツフェスティバルと無料コートの存在が大きいと考えられよう。男性E、F、Iは、友達と集まってバスケを行い、都合が合えばバランガイのスポーツフェスティバルにエントリーするとのことであった。チームはバランガイのフェスティバルの前のみ結成され、試合が終われば自然と解散するという柔軟性の高いものとなっている。男性Eによると、「バスケをするのにお金はほとんどかからない。お祭りが始まる前にバランガイでの代表チームになると、ユニフォームなどはすべてバランガイの人々からの寄付で賄われる。子ども達と人々の家に行き寄付をもらう。この額は少なくとも全く構わないんだ。差し入れをもらうこともよくある」とのことである。

またスクールチームに所属していても、バランガイでチームを結成して試合に出場することができる。大学生A、B、Cは大学のバスケ部のエースであるが、バランガイのフェスティバルも「都合が合えば参加する」と答えている。すなわち中学生以上になると、スクールチームに所属してなくてもコミュニティの中で自発的なチームとして継続的にプレーすることが可能なのである。

一方学校での子ども達の様子であるが、部活として正式にプレーしている者もいれば、特に部活に所属していなくても、写真6のように高校の昼休みのコートでは生徒たちが自由にバスケを行っ



写真6 高校の昼休み

ている様子が見られた。日本の高校の場合、昼休みなどに自由に体育館を使うことは難しいことも多いが、フィリピンの場合は、特にバスケットシューズも必要なく裸足で自由にプレーをしている様子が印象的であ

った。

継続への心理的側面としては、タクシードライバーJの話が象徴的であった。タクシードライバーJは、「一日中バスケットをしていた。夜間の大学に通っていたから、夕方からは大学。その前に朝6時頃から友達に来てバスケットを行い、その後一度家に帰って昼寝。そしたらまた友達呼びに来て夕方までバスケット。それから夕方は勉強。こういう日を繰り返していた。」と語った。今回のフィールドワークを通して、インタビュー対象者にはなっていないが、短い会話をした多くの人がバスケットは大好きで時間があれば行こうという話をしてきた。すなわち、バスケット継続へのモチベーションの原点に「楽しさ」(蓑内, 2013)が存在し、それらが仲間達を通して伝染し合っているようであった。

またバスケットを継続するにあたり、バスケットに対する男性としてのプライドも示された。男性Eは「若い者には負けてられない。若い者は体力はあるが、頭はない。子どものようなプレーしかできない。どうすれば審判に見つからないようにタフなプレーができるか、どうすれば相手の体制を崩せるかなど、私たちには経験がある。私たちがプレーをしている時には、若い人は私たちにコートを譲らないといけない」と、プライドおよび身体活動の有能感が継続を促進させていた。

一方興味深いことに、バスケットの継続は、障害を

持った人も同じように可能であった。障害者の兄をもったLによると「兄はバスケットやダンスを通して友達が広がっていった。スポーツフェスティバルでは、ダンスもある。3日間ずっと通い続けて踊っているうちに、どんどん知り合いが増えていったみたい。日ごろは、バランガイのコートに行ってはフリースローなどを自由にやっている。特にチームに入ってプレーをするわけではないが、バスケットは大好きで自由にやっている」。このように、チームに所属せずに一人で自由に体を動かせる方法としてもバスケットは有効であり、それを可能とする雰囲気や物理的条件が整っているのである。

(3) アスリートコースへの道筋と教育機関

子ども達のバスケット開始のきっかけや継続の要因は、前述したとおりであるが、フィリピンにおいてバスケットが盛んであるということは、選手養成も必要不可欠である。それでは、アスリートとしてのバスケット選手はどのように見出され育成されていくのであろうか。今回のインタビューでは、アスリートとしての位置づけは、大学の学生4名(A、B、C、D)、プロにチャレンジしていたタクシードライバーのG、同じようにプロを目指していた女性Jの父親の例が参考になろう。

アスリートへの道を歩む子どもたちは、中学生のスクールチームから本格的に選手としての道を歩んでいくこととなる。スクールチームでの活躍、または場合によってはバランガイのチームでの活躍により、高校の強豪校からスカウトされる。強豪校は私立が多いが、学校からスカウトされると奨学金が支給されるため、貧しくてもアスリートとしての道が開ける。強豪校のバスケット部は、スカウトされていなくてもトライアウトに受かると入部が許可され、ここでも奨学生としての可能性が残っている。大学も同じような条件で、スカウトされて強豪校のバスケット部に入部する、またはトライアウトに合格しバスケット部に所属し競技を行う。

21歳の大学生Dは、「中学にあがって初めて本格的にバスケットを行った。それまではバスケットをする勇気がなかった。父はバスケットが上手く、中学になってからは毎日朝6時に父と一緒にドリブルの練習をしていた。中学の時にスカウトされ、A高校に入学した。強豪校であったが、すごく厳しく、よく殴られたりした。とてもつらかったので、こちらの大学のバスケット部からスカウトされてよかった。」大学ではスカウトされて奨学生となる場合と、大学入学後選抜により奨学生となる方法がある。強豪校バスケット部のエースの大学生A、B、Cは、「学費のみでなく生活費も支給される。しかし奨学金が継続できるかどうかの選抜試験が毎年ある。」と答えている。彼らは大学を卒業してからはプロのトライアウトを受ける予定だそうだ。

プロの世界に入るためには、大学からスカウトされて経験を積んでいく方法だけではなく、自主的に練習し、バランガイで試合などをして実力をつけていく方法もある。いずれにせよ、最後はプロのトライアウトがある。タクシードライバーGは、強豪大学でのプレー経験はないが、毎日何時間もプレーをしており、プロを目指しトライアウトを受けていたとのことだった。また女性Jの父親は、大学強豪校で経験を積みプロのトライアウトを受けたが、最終で不合格となった。プロにはなれなかったが、かなり近いところまで行っていたようだ。プロの試験は落ちてしまったために、他の仕事を選ばなくてはならなかったが、「バスケットでのファイトマネー」でお金を稼いでおり、プロ以外のアスリートとしての道が存在しているようであった。

(4) 子どものスポーツに関わる親の役割

最後にバスケットに関わる親の役割についてだが、今回インタビューを行った大半は、バランガイでバスケットを行っていた者であり、彼らは「親の役割は『ない』」と答えていた。バランガイでのスポーツフェスティバルの際は、家族総出で応援に

来るが、基本的に村の中にコートがあるために、子どもたち自身でコートに出かけ練習をすることが可能であり、特に親による送迎や当番などは必要ないようであった。バランガイのチームの場合、練習風景を親が見に来ることもほとんどないようで、試合の時のみ応援にくるとのことであった。

一方、最近富裕層では私立の小学校でスポーツのスクールが人気となっている。放課後にサッカーや女子バレー、男子バスケットなどの種目において専門のコーチを雇って有料の指導を受けている子ども達も増えている。この場合、私立小学校そのものが自宅から離れていることも多く、親の送迎や月謝などの金銭的な負担もある。私立小学校の放課後に女子のバレー練習していた親子に話を聞いたところ「週3回は放課後送迎をするので、大変なの」と答えていたことが印象的であった。

またトップアスリートの大学生4名に親の関わりを聞いたところ、彼らは中学生から学校の部活動を中心にバスケットを始めたため、小学生時代の親の関与はほとんどなかった。フィリピンの父親はバスケット経験者が多いため、大学生Dのように中学生から朝涼しい時に父親と一緒に練習することも多いようであった。奨学金獲得やプロを目指して、親からのプレッシャーはないのかと尋ねたところ、4人の大学生は全員口をそろえて「親は応援してくれるだけで、好きにやっていると聞いてくれているとのことであった。また「親は自分たちのことを誇りに思ってくれている」との発言もあり、特に大学生A、B、Cは市を代表するような選手であるために、奨学金打ち切りの心配もなく、親子の距離もほどよい関係のようであった。

一方大学生Dはまだレギュラーメンバーではなく、父親とともに努力しながら大学の部活セレクションに通過している。父親からのプレッシャーは感じたことないとのことだったが、大学生Dの父親は大学体育館によく練習を見に来ており、息子のことを気にかけているようであった。



写真7 大学での練習を見学する父親（右から2番目）

次に、親とコーチとの関係についてだが、バラングアイのチームの場合は、友人でチームを結成していることも多く、コーチがいないこともある。その一方、バラングアイ代表チームを結成することもあり、男性Eは代表チームを指導した経験があり、親との関係に関しては「親からはよく感謝される。あなたしかいないから子ども達を見てくれと頼まれた。親たちは試合になると興奮することもある。親たちも怒鳴ったりする。子どもに指示を出して怒ったりする。親同士のファイティングや子ども同士のファイティングがあったりする。それに対しては、何も言わない。コーチはあくまでも子どもに対して指示するのみ。親たちとのミーティングも特にない。」と答えており、コーチとして子どもの指導は行うが、親と協働的な関係を作ることには注意が向けられていないようであった。

4. 考察

(1) フィリピンにおけるバスケット参加動機とバスケットを継続できる要因

北村（2013）はスポーツの熟達化モデルとして、遊び体験を通じた趣味的なスポーツ参加への道筋、遊びを通じたトップアスリートへの道筋、早期からの専門的育成を通じたトップアスリートへの道筋に分けている。フィリピンの場合は、前者2つが該当するであろう。

本研究を通して、子ども達は早い時期からテレビや村のスポーツフェスティバルを通して遊びとしてのバスケットに触れる機会が保障されていることが明らかになった。これらは子どもがバスケットへの参加動機を高める要因となっている。特に小学生の頃は、本格的に競技スポーツとして行っている子どもたちは少なく、ゆえに親の関与も少ない。遊びの中でストリートバスケットを行ったり、バラングアイの無料コートで自由にバスケットを行ったりしている。たまにバラングアイのチームに子ども達が出場するときも、バラングアイの中のコートで練習するため、親の送迎などはほぼ必要なく、親はバラングアイのスポーツフェスティバルの際に他の住民とともに応援に行く程度である。このようにフィリピンでは、小学生の時期に子どもの自発的な行動の中でバスケットへの関わりが生じているのである。北村（2013）が指摘する「遊びを通して」という部分が長期間保障されていることとなろう。小学生の時期は公式試合がほぼないために、勝利至上主義に傾くこともなく、子ども達のスポーツへの動機づけとなる「仲間関係」（杉山，2013）が形成しやすいのかもしれない。親の支配的対応がないがゆえにバーンアウトも少ないのかもしれない。ただし、私立小学校では、徐々に月謝を払う習い事としてのスポーツが広がっており、その場合、親の送迎も不可欠であり、日本やアメリカの状況に近づいているといえよう。

子ども達が専門的にバスケットを経験するのは、一部の習い事バスケットや小学校のスポーツフェスティバルを除くと、中学校での部活動となる。日本の場合、部活動に所属すると他の活動との両立は難しいが、フィリピンの場合、学校の部活動に参加しつつ、村のスポーツ大会にも自発的なチームを結成しエントリーすることができる。つまり、強豪校で部活動に入れない、または学校の部活動を継続できなくても、有志で村の大会に出ることができ、いわゆる「ドロップアウト」という概念そのものが日本と異なるのである。日本の場合、部活動を辞めるということは「ドロップアウト」し

たことを意味する。なぜなら、部活動以外の受け皿が少ないため、部活動を辞めるとその競技の継続そのものが難しくなるからである。フィリピンの場合、バランガイのフェスティバルに数名でエントリーできる。そのチームの特徴としては、特定の期間だけの形成であるがゆえに拘束力が少なく、生涯スポーツとして継続できることにつながっているであろう。バランガイのスポーツ大会は、勝ち残ったチームはバランガイ対抗の競技大会に出場することになり、それは「夜まで盛り上がる」(女性J)、「かっこいいし、もてる。ヒーローになれる」(高校生K達)などの言葉からも明らかかなように特別なものである。ゆえに短期間でのチーム結成でありながら、「特別な試合」「ヒーロー」「達成感」などが正の強化刺激となり、モチベーションの強化につながっているであろう。

一般的にスポーツの継続要因として、①心理的要因、②人口学的要因および生物学的要因、③行動特性要因、④社会的および文化的要因が挙げられる (Van Stralen et al., 2009)。Van Stralenらを基にした松本 (2013) によると、中高年者における身体活動の継続に関する心理的要因としては、身体的効果や心理的効果に関する気づきやストレス、生物学的要因としては健康感、行動特性要因では成人期の身体活動経歴、社会的および文化的要因としては友人や仲間からのソーシャルサポートや社会的規範が挙げられた。これをフィリピンの状況に当てはめると、小さいころからバスケットをしているという活動歴があり、かつ仲間からのソーシャルサポートも提供され、バスケットを通して達成感や自己効力感、他者からの承認などを得ていることが継続要因と関連するのではないかと考えられる。

(2) バスケ継続を保障する環境

本研究では、フィリピンの子どもがバスケットへ関わるきっかけ、青年が学校以外でバスケットをする機会、成人がバスケットを継続する機会を検討してき

た。その中でフィリピンにおけるバスケット継続の環境要因としては、バランガイのスポーツフェスティバルと無料コートが存在が大きいと考えられた。後藤 (2004) は、フィリピンの住民自治組織・バランガイの機能と地域社会についてフィールド調査を行っている。フィリピンの地方都市で村人にアンケートを実施したところ、バランガイ主催のイベントに参加したことがある活動の内容をみると、スポーツ大会がもっとも多く (58.9%、33件)、次にバランガイ組織主催のセミナー (32.1%、18件) との答えが多かった。約6割の住民がバスケットの大会観戦に参加したことがあるというデータから見て、バスケットをはじめとするスポーツは生涯スポーツとして根付いていると言えよう。

フィリピンではバランガイの選挙は様々な利害が関連する一大イベントであり、日本領事館 (2018) から「バランガイ選挙に伴う注意喚起」が出るほどに熱を帯びるものである。その選挙対策にも「バランガイにコートを立てる」ことが公約に出るほど、住民自治としてのバスケットの機能は大きいのであろう。またバランガイにとってのスポーツの機能は、麻薬撲滅や犯罪抑制とも関連し (後藤, 2004)、貧困対策としての意味も持つ。つまりスポーツにおける社会的・政治的意義は住民に潜在的に影響を与えるのである。一方で、国民の生活にとっては、身近な無料コートがあるということはバスケットをプレーすることへの利便性が高く、子どもにとっては、親の送迎なしに自発的に練習等に通えることを意味する。そしてそこには身近なロールモデルとなる大人や先輩の存在があり、子どもたちは疑似体験として「自分たちで見て学ぶ」、そして実際に子ども達同士で遊びの中でバスケットのプレーを工夫するという学びの根底にあるモチベーションを高める要素が多く含まれていることも特記しておきたい。

(3) 今後の課題と日本の子ども達のスポーツ環境への提案

本調査では、インタビュー調査およびフィール

ドワークにより、フィリピンの子供達への参加および継続について検討してきた。しかしながら、実際のスポーツフェスティバルなどは参与観察できていないため、資料に限界が見られる。今後は事例数の増加に加え、バラングアのスポーツフェスティバルを参与観察しながら情報収集を行っていききたい。

最後に日本の子供達のスポーツ環境への提案であるが、フィリピンにおけるバスケットは日本と比較して「継続」が容易であることと「遊び」の時期が長いことが日本の子供達へのスポーツ環境へ応用できると考えた。まず「継続」が容易であることについてだが、子供達の生活圏内で無料のバスケットコートがあることやロールモデルとしての大人の存在があること、そして部活動以外の選択肢が保障されていることが挙げられる。近年の日本の子供達のスポーツ環境は早期教育やバーンアウトが問題になっており、そこには親の過干渉やハラスメントの存在を見逃すことができない。身体を動かす遊びの期間を保障し、自発的に活動できる期間をある程度保障することで「楽しむ」経験、「自分たちで工夫する」経験を子供たちに保障することが長期的に見て、運動を「楽しむ」ことにつながるのではないかと考えた。これらの要素を日本でいかに保障できるのかが今度の課題であろう。

引用文献

- Antolihao, L. (2012). From baseball colony to basketball republic: Post-colonial transition and the making of a national sport in the Philippines. *Sport in Society*, 15 (10), 1396-1412.
- Blanco, D. V. (2016). Sports governance stakeholders, actors and policies in the Philippines: current issues, challenges and future directions. *Asia Pacific Journal of Sport and Social Science*, 5 (3), 165-186.
- Brustad, R. J. (1993). Who will go out and play? Parental and psychological influences on children's attraction to physical activity. *Pediatric Science*, 5, 210-223.
- FIBA.Basketball (2018). Fiba World Ranking Presented By Nike. <http://www.fiba.basketball/rankingmen> (2018年11月4日閲覧)
- 後藤美樹 (2004). フィリピンの住民自治組織・バラングアの機能と地域社会: 首都圏近郊ラグナ州村落の住民生活における役割 国際開発研究フォーラム、25、61-80.
- 木村治生・邵勤風・朝永昌孝 (2017). 学校外教育活動に関する調査 2017: 幼児から高校生のある家庭を対象に https://berd.benesse.jp/up_images/research/2017_Gakko_gai_tyosa_web.pdf (2018年11月6日閲覧)
- 北村勝朗 (2013). 第8章 トップアスリートの動機づけ. 西田保 (編著) スポーツモチベーション (pp. 120-132) 大修館書店
- 在フィリピン日本国大使館 (2018). 【領事班からのお知らせ】 バラングア選挙に伴う注意喚起 https://www.ph.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000525.html
- 松本裕史 (2013). 健康スポーツの動機づけ. 西田保 (編著) スポーツモチベーション (pp. 69-84) 大修館書店
- 蓑内豊 (2013). スポーツ参加の動機づけ. 西田保 (編著) スポーツモチベーション (pp. 54-68) 大修館書店
- 中澤 篤史 (2017). そろそろ、部活のこれからを話しませんか 大月書店
- 大橋恵・藤後悦子 (2017). アメリカカリフォルニア北部における地域スポーツの実情 東京未来大学研究紀要、12、123-131.
- 大橋恵・藤後悦子・井梅由美子 (2018). ジュニアスポーツコーチに知っておいてほしいこと 勁草書房
- Philippine Sports Commission (2017). Philippine Sports Commission: Office of the president of the Philippines. <http://psc.gov.ph/> (2019年2月25日閲覧)
- 杉山佳生 (2013). 第7章 ジュニアスポーツと動機づけ. 西田保 (編著) スポーツモチベーション (pp. 106-117) 大修館書店
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵 (2017). チームのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響 モチベーション研究、6、17-28.
- 藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋恵 (2017). 小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレンティング コミュニティ心理学研究、21 (1)、80-95.
- Van Stralen, M. M., De Vries, H., Mudde, A. N., Bolman, C., & lechnet, L. (2009). Determinants of initiation and maintenance of physical activity among older adults: A literature review. *Health Psychology Review*, 3, 147-207.

本研究は、科研費 18K03119 の補助を受けた。

(とうご えつこ) 東京未来大学
(おおはし めぐみ) 東京未来大学

